

# 学校教育高度化センター関連事業（イノベーション科研）

## 基幹学習ユニットにおける本年度の活動

報告者 市川 伸一（研究科長・教育学研究科 教授）

### 1. 基幹学習ユニットの役割

基幹学習ユニットは、これまでの学校教育の中で、内容的には教科や「総合的な学習の時間」などで行われていた学習を、「社会に生きる学力」という視点から見直し、新たなカリキュラムとして導入しようとするものである。

以下では、それぞれのプロジェクトの担当者が、進捗状況を報告する。（市川伸一）

### 2. 各プロジェクトの進捗状況

#### (1) 学び方の学習プロジェクト

学び方の学習プロジェクトでは、教科の学習の学習観、学習方略等に関する指導・支援によって、意味理解や思考過程を重視した自律的な学習を促すことを目的としている。2011～12年度にかけて、東京大学教育学部附属中等教育学校、埼玉県立川越高等学校、同本庄高校などで、認知心理学に基づく学習方略の講座を実施してきたが、発達段階や学力により、必ずしも理解、定着がなされることが事後アンケートから明らかとなった。そのため、2012年度は、中1～高2まで、段階を追ったカリキュラム素案をつくり、その一部を東大附属の1年生に実施した。テーマを記憶に絞り、無理のない方略を教示することで、理解・興味・関心をかなり高めることができたと思われる。

（市川伸一・植阪友理）

#### (2) 言語力育成プロジェクト

本プロジェクトでは、中等教育段階において、英語科、国語科という、両言語教育教科を横断してメタ文法能力を育成する文法指導カリキュラム開発を行うことを目的としている。これまでも

文法指導で独自のカリキュラムや授業方法を試みている東大附属中等教育学校英語科、国語科の先生方との連携協力の中で実際に行ってきた。

本年度は、第一に、英語科、国語科における文法指導の課題等のこれまでの先行研究のレビューをまとめた。また第二に、前期、後期の2回、東大附属中等教育学校5年生3クラスを対象に、英語科、国語科それぞれの教科授業内において3クラスでメタ文法育成のためのデザイン実験授業を行っていただき、プロジェクトメンバーによる授業観察、授業談話分析、生徒への事前事後調査を実施した。それによって、1時間の授業実施でも取り上げた内容範囲に関して効果を持ちうることを明らかにし、特に文法を苦手とする生徒への取り組みを促す可能性を指摘した。また、当該デザイン実験授業についての授業協議会を英語科国語科両教科の先生方合同で行うことを試み、その協議会談話分析も行うことで、あらたな形の中等教育での授業協議会のあり方、またメタ文法カリキュラム開発への新たな着想を得ることができた。第一のレビュー研究、第二の前期実施の英語科国語科でのメタ文法授業の効果検証に関しては、本年度末刊行の教育学研究科紀要にプロジェクトメンバーの共同執筆論文としてまとめた。また昨年度末に附属学校生徒1～5年生に協力いただいて文法学習方略や文法学習観調査を行った結果分析も実施し、次年度にむけ現在論文化を行っている。次年度は、本年度後期デザイン授業の分析をもとにまとめるとともに、引き続いて、異なる担当者、学年、単元内容でメタ文法授業実証研究を実施していくとともに、各教科でのメタ文法授業事例や

教材開発を行い、メタ文法カリキュラム開発の検討を行う予定である。

(秋田喜代美・斎藤兆史・藤江康彦)

ムに導入している渋谷学園渋谷中学校高等学校を訪問し、担当者から情報を収集した。(根本 彰)

### (3) 数理能力の育成プロジェクト

本プロジェクトでは、社会に生きる数理能力を育成する授業過程やカリキュラムを心理学の視点から解明することを目的としている。

2012年度は、東京大学教育学部附属中等教育学校、名古屋大学教育学部附属中・高等学校、公立小学校で以下の研究を実施した。まず高校1、2年の数学の授業過程の分析から、多様な解法の発表が一部の生徒における知識の主体的な関連づけをもたらすこと、日常的事象に関わる多次元データの提示がデータの多様な解釈や関連づけを促すことが示唆された。次に高校1年生の数学的リテラシーを測る課題を試行し生徒の記述内容を分析した結果、日常的知識と関連づけられた概念的理解の深化に3つの水準が同定された。また小中学校の算数や理科の単元で日常的事象に関わる問題に取り組みせる効果を、事前・事後テスト等の分析をもとに検討中である。今後は、授業時の協同探究過程や、年間カリキュラムの構成について検討する予定である。(藤村宣之)

### (4) 探究型学習プロジェクト

東京大学教育学部附属中等教育学校の卒業研究を中心に検討している。今年度は昨年を引き続いて、図書室資料の整備、機器の整備(電子黒板の導入、情報検索のためのiPadの導入)、卒業論文を書き終えた6年生に対するアンケート調査を実施した。さらに、1月から2月にかけての4年生がテーマ選定をする時期に、図書室に大学院生が卒研アドバイザーとして入ってテーマ選定過程を記録することにより、卒業研究の執筆過程を具体的に検討した。また、附属学校が卒業研究を始める際のモデルとなったつくばの茗溪学園高等学校および進学校であると同時に論文執筆をカリキュラ